



新編 婦志 後編 上

光文堂

三冊

八景山房

2947
43



特
2947
43

潮来婦誌後編附言

本清

公疾文仁之丙寅三月廿初旬丙丁の災小

罹りて志が〜管生孤体りの間柳齋主人

小誘是杖と江東小東く小總佐原小卦

一日香取の宮小宿く峰路を朝来り

但し媚門小登き遊樂とるるり一昼夜

翌日み仲小想を双發く且發端を編

又萬葉堂より再び筆を採く元五日



かゝる著述校と悦と。夫詩歌連係不遊
ふ徒を公の部とみし隨てこゝに又隨て撰と
されば紀行と行書不務と自ら獨歩の公
と善ふ吾堂れ戯作者と雅中乃俗中
く俗中れ雅あり。故不專く撰藝と宗と
よく戲謔の書と作。人々も願と解とむ。
彼詩歌連係不遊不徒。莫み臨んごうご
か如く是則吾堂の公の赴く所ありけり

潮来婦志と著と新以あり。志んごう
ども地理不疎く。人情不通せざれば風土
乃方言。娼門の規矩。韻誤錯雜多あり。
杜撰甚く公舛く。唐く世不布く。公評
さざし。漫不寛おく。出さざし。源帳中
み秘と而色

江戸

游戲堂三馬





比例

○ 言語の大概江戸小異り

五音の調子小より清音と

濁音ぬりよとの間々

○ 清音を濁音に通用するも

「カキクケ」に「タチツテ」の二音に

「ハヒフヘ」も清濁もく叶いさる

江戸の

○ 常の「タチツテ」通例の濁音小あり

「ハヒフヘ」の「カキクケ」の「タチツテ」の二音に

「ガト」が「カ」よ二濁をくらり

「中」が「カ」よ二濁をくらり

又「タチツテ」の音も清音の濁

あれども「タチツテ」の音も清音の濁

利う。餘も推しきる

式亭天女丸

代百廿四廻

月水の順を流るる名が
今このめを休む妙薬
思ひ出さるる「ハヒフヘ」の音も清音の濁
その「ハヒフヘ」の音も清音の濁
思ひ出さるる「ハヒフヘ」の音も清音の濁

此潮来婦志乃一篇也。家藏が著述數十種に一種の
 して北総左原漫遊四羈定の手澤あり何某が代作して
 古人の名を旁世の中の眼をくらまをのつふせりあは
 年月のさるや二十六年故といへども酒と落と親流行
 ふかしくあつて神一実不風来が紙作の正統を流味とて
 しきりぬ鳥の口まの似たり一涌流まの今更よしぬ前
 のさる本町庵の志れが江戸の水は魚腹身よ其の曉ぬ
 御類乃藻吾妻番製法乃間

天保十庚子仲秋

式亭小三馬題



潮来婦誌卷之

江戸

式亭三馬著

よ〜れあ〜と〜ゆ

鳥を稲荷山に林ぬ祐ぐうとそめり人
 園部川の岸ふ山とあは流あぐ虫の喜むのつれ
 小田乃蛙のさる音とおの流
 物淋しく山寺の晚鐘夕餉とあ〜と〜
 娼樓

子夜を糸の糸
 咽を絶くか
 只に世をさるく
 小あつとすむの
 名を
 なるべくふ
 小
 らん

青面
 金剛
 秋露
 とわらひ
 石佛
 石佛

石佛の内でも紅の磁巾と云ふも一葉の馬の
衣を招のり付紐を筋遣しと云ふも
ありて布ありてと云ふも中か石地ある右の
肩より湯杖のわらひもいそぎけりありて
かゝる石の中か玉を打ち四角おまごけりあり
と云ふもせありて本像ありて諸代建まふ但馬守
と云ふもいづれかそのまゝかいしんいしんて池子の
しんが鱒がとれると云ふもいづれかそのまゝかいしんいしん

竹を傾小と云ふもありかさんちまが合ふせ川井竹
と云ふもいづれかそのまゝかいしんいしんて池子の
しんが鱒がとれると云ふもいづれかそのまゝかいしんいしん
ありて布ありてと云ふも中か石地ある右の
肩より湯杖のわらひもいそぎけりありて
かゝる石の中か玉を打ち四角おまごけりあり
と云ふもせありて本像ありて諸代建まふ但馬守
と云ふもいづれかそのまゝかいしんいしんて池子の
しんが鱒がとれると云ふもいづれかそのまゝかいしんいしん

とらんがらとと 飯粒のお月通うらまらるる人びら
 わらあつちき 清うらまらるる 出用するも物のあはれ
 早く中宿飯よまら 上りりく 伊勢の油揚を
 麻のきり 味を突く 大根と漬
 とらで 江戸者も 娘もよまら 江戸者
 娘もや かし飯と食う 白米のお飯も
 ぬらぬら 新りちやカラれ中どがまら
 百の店賃と拂く 常食より 四をとり 常
 平生指布が ぬらぬら 壽の上白魚を 漬
 後ころや 漬の納 後 東の子ご 美濃の
 小豆や ぬらぬら 山つけ生果 ぬらぬら
 中宿と 中宿と とうら ちやがれ 川井
 とうら ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら
 川 ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら
 吉 ぬらぬら ぬらぬら
 ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら

田舎草三

川井

吉

よのぶの女と出〜おせいのききつゝあはれい 中
思ねる女夫でもぶいも海をせぬろ〜お幼〜
こ〜い〜おぬ〜おせいの女はあつた〜おつた〜
ま〜い〜おぬ〜おせいの女はあつた〜おつた〜
こ〜い〜おぬ〜おせいの女はあつた〜おつた〜
おぬ〜おせいの女はあつた〜おつた〜
おぬ〜おせいの女はあつた〜おつた〜
おぬ〜おせいの女はあつた〜おつた〜
おぬ〜おせいの女はあつた〜おつた〜
おぬ〜おせいの女はあつた〜おつた〜
おぬ〜おせいの女はあつた〜おつた〜

よのぶの女と出〜おせいのききつゝあはれい 中
思ねる女夫でもぶいも海をせぬろ〜お幼〜
こ〜い〜おぬ〜おせいの女はあつた〜おつた〜
ま〜い〜おぬ〜おせいの女はあつた〜おつた〜
こ〜い〜おぬ〜おせいの女はあつた〜おつた〜
おぬ〜おせいの女はあつた〜おつた〜
おぬ〜おせいの女はあつた〜おつた〜
おぬ〜おせいの女はあつた〜おつた〜
おぬ〜おせいの女はあつた〜おつた〜
おぬ〜おせいの女はあつた〜おつた〜
おぬ〜おせいの女はあつた〜おつた〜

ト申高にたがし備一向
かこつておぬあはれい

事なきはあつて **後** コウ 若くは **後** 子よき **後** 子の **後**

流るる **後** 若くは **後** 子よき **後** 子の **後**

あつて **後** 子よき **後** 子の **後** 子の **後**

御が立場 **後** 子よき **後** 子の **後** 子の **後**

は **後** 子よき **後** 子の **後** 子の **後** 子の **後**

ありて **後** 子よき **後** 子の **後** 子の **後** 子の **後**

あつて **後** 子よき **後** 子の **後** 子の **後** 子の **後**

あつて **後** 子よき **後** 子の **後** 子の **後** 子の **後**

あつて **後** 子よき **後** 子の **後** 子の **後** 子の **後**

あつて **後** 子よき **後** 子の **後** 子の **後** 子の **後**

あつて **後** 子よき **後** 子の **後** 子の **後** 子の **後**

あつて **後** 子よき **後** 子の **後** 子の **後** 子の **後**

あつて **後** 子よき **後** 子の **後** 子の **後** 子の **後**

あつて **後** 子よき **後** 子の **後** 子の **後** 子の **後**

あつて **後** 子よき **後** 子の **後** 子の **後** 子の **後**

あつて **後** 子よき **後** 子の **後** 子の **後** 子の **後**

あつて **後** 子よき **後** 子の **後** 子の **後** 子の **後**

あつて **後** 子よき **後** 子の **後** 子の **後** 子の **後**

あつて **後** 子よき **後** 子の **後** 子の **後** 子の **後**



とく人の子孫に世を食す者 **吉** たんじょうき

次その上より見立替り馬鹿押の強くも名前の通

也 人の子に **也** あんその **也** 遣 **也** 形造り

あふある。世内をめぐりおのれをこころまげられがゆゑに
おのころ内中若くは送り籍あり。食ひやうきはよく晴る

あふ あふ 二人つれやく あふ あり。床の厚気とありたふありに
のちよく あふ 喜のまき あふ さいふ あふ さいふ あふ さいふ

多敷流しと あふ さいふ あふ さいふ あふ さいふ あふ さいふ あふ さいふ

つと法 **吉** 人の同と あふ さいふ あふ さいふ

印も あふ さいふ あふ さいふ あふ さいふ あふ さいふ

あふ さいふ あふ さいふ あふ さいふ あふ さいふ あふ さいふ **吉** 人の同と あふ さいふ

いけぞん あふ さいふ あふ さいふ あふ さいふ あふ さいふ あふ さいふ

あふ さいふ あふ さいふ あふ さいふ あふ さいふ あふ さいふ

次 お あふ さいふ あふ さいふ あふ さいふ あふ さいふ

お あふ さいふ あふ さいふ あふ さいふ あふ さいふ あふ さいふ

中 あふ さいふ あふ さいふ あふ さいふ あふ さいふ あふ さいふ

次 ま あふ さいふ あふ さいふ あふ さいふ あふ さいふ

一 あふ さいふ あふ さいふ あふ さいふ あふ さいふ

おし二人のきつてゆくは船の通し
をその次ありきこの内がはる人量の内が知今を
おふあれは雲のしほくはゆらゆらと風もあつて
そんお板をさるるあつてとれちやあつてしり
[井] てもおまゝにほはちかありかうはしとらほ人
解れお似合あられまぬまゝ者うりもよ
りまゝにちらあめおの空成てさうはと [後] せん
かゝそんあつたのち地とややとあましつる
條目よのうと親きうしゅう [中] イエとやうてまで
さうませぬう一向のぬえ又 [吉] 勢もおんごやほく
六百の女を寄し二集あつて出さうを五百とて
せしとらるは人作とさうさうとさんと板がさう
まゝにちかありかこのうさうしゅう拂入とさう
まゝに女がかりさうと二集の酒に斤の六百 [中]
[上] お清らけのあつてさうとさうとさうと [吉] ンヤ
戸酒が二斤とく上酒のさうとさうと七百の外も者



とし各の行へ由りて あんがのれがらううううの律本 吉
 終人かまへし いひしはるる儀あめりヨウ 浦汐とあ
 中へ おぼしめされしと純子道 語りて ヨ 吉
 ぶ ううううううううううううううう ヨ 吉
吉 ううううううううううううううう ヨ 吉
吉 ううううううううううううううう ヨ 吉
吉 ううううううううううううううう ヨ 吉
吉 ううううううううううううううう ヨ 吉

吉 丑 ちんらんわ。妙くく。ニテてあぐかひのうら
おれも又うらぐらぐら。が人合持をりちとらふ
ゆんご。後へ何馬の馬の首う牛の尻う若れ敷
そんども。部々くつる。お者ぐ。此の。故。競。でも
まろやア。二尺戸の。棟。割。ぐ。ま。物。う。中。向。の。合。持
ど。ハ。チ。一。樹。の。う。ち。一。河。の。流。も。他。室。の。縁。と。ら。ふ。ゆ
ち。声。色。あ。も。と。も。ら。ふ。て。あ。又。い。戸。子。と。ぶ。ら。く
結りや。女。島。冥。加。お。叶。の。と。せ。の。ん。ま。の。海。の。う

く。か。向。く。ら。て。あ。い。の。く。と。わ。ら。し。お。角。つ。ん。ま
お。め。く。あ。う。ち。ら。き。清。め。ら。れ。ぐ。あ。る。も。と
む。う。げ。も。後。人。女。と。よ。ん。わ。く。と。れ。ら。あ。お。角
一。ん。の。修。り。者。と。う。袋。と。あ。ら。ま。つ。る。え。ま
中。て。も。修。り。者。と。う。袋。と。あ。ら。ま。つ。る。え。ま
を。能。く。し。修。り。者。と。う。袋。と。あ。ら。ま。つ。る。え。ま
固。て。あ。入。何。と。き。ら。も。ア。ン。く。と。も。う。う。て。後。さ。ま。お
の。小。浪。で。志。す。の。ん。ま。の。海。の。う。ち。と。ら。ふ。ゆ

何れもいふ事なれば後周を後分る有
もんが押れがははれと云ふよりくつねるや
何とて周にサ志と云ふ事をもつてある
しとて始に後周に言ふ事よくある事
周であつたが中か床をせよとて遠く周に
中らうの床とせよとて何のゆゑ周に床と
せよとてせよとてその周に床とせよと
せよとていふ事なれば後周を後分る有

だまらぬ事なりやうぬいへば後周に竹の
いふ事なれば後周に奴を周にせよとて
後周を氣とせよとて言ふ事なれば後周
周に言ふ事なれば後周に後周を言ふ事
いふ事なれば後周に言ふ事なれば後周
いふ事なれば後周に言ふ事なれば後周
いふ事なれば後周に言ふ事なれば後周
いふ事なれば後周に言ふ事なれば後周
いふ事なれば後周に言ふ事なれば後周

くぬと連中あつらんがごとく思つたら流し一匹もあつ
ておち家々別あつらんゆへに因どつても猪
も小ぢやぶれこや鹿島赤坂のおれとゆやれ
おれふちと之板とを固取し付ふとるもん之に
持つてや江戸坊らも動定しつらんぬ
が中かきのおれと奴と今もつらんぬ
今日までの雑用とおれの方へ之替へらん
ト六百六十文トを世國中へ流してとるらん

吉よと飛くまじあつらんハ文々の茶代と廿五郎
拂らん二割十二郎もあつらんぬまじあつらん
りふ番をぶつて文々の園子が五郎り一盒十文も拂
らんぬらん喰らつらんぬらん二割會せらん文割と
らんらんらん
おれが金が皆遠のらんぬらんぬらん先おれが二面
しと金が二方お徳田のらん二朱ト見事か早
一方お徳田一両らんらんらん金も何と用と病

よこしやぐれ

けりんをふか馬にわらわれきつゝあふり、しやうふ
着いとの中宿あふり来る、血ぞ血と流るふ

あどりのお宿りのあいらあふり

中宿 はな 是れ あつあつ お中あふ

あどりとあどりの中りふあふり

あつあつ

とどろいぬ 踊り せき せき お お あつあつ あつあつ あつあつ あつあつ

サ サ あつあつ あつあつ あつあつ あつあつ あつあつ あつあつ

イヤア あつあつ あつあつ

